

続きまして、「御帰山」で

お名前がわかっている方だけですが、
ご紹介をさせていただきます。
ご支援ご厚情をいただき、本当に感謝
申し上げます。

井波別院活性化プロジェクト

蓮如上人井波御下向550周年記念事業

実行委員長 教区会議長 竹部俊恵

蓮如上人井波御下向550周年記念御影道中

実行委員長 井波別院輪番 常本哲生

御影道中瑞泉寺実行委員会 島田勝由

井波別院二十八日講 土田信久

井波別院同行の会 楠 則夫

井波別院杉谷女性会 山田由理枝

井波彫刻協同組合 花嶋弘一

越中ブロック執行部

太田浩史(講師) 高坂道人 常本哲生

金沢ブロック執行部

福島一玄(代表) 豊富高宏 西河寿夫

南加賀ブロック執行部

佐々木浩然(代表) 出雲路雅 清水教示

支援委員 出雲路香 多田明弘

「御帰山」

随行教導

太田浩史(富山県) 國分大慶(石川県)

宰領 藤原猶真(愛知県)

供奉人 川島弘之(茨城県)

高木芳信(愛知県) 清水教示(石川県)

岡本 漸(福井県) 坪井重樹(岐阜県)

豊富高宏(石川県) 山下春光(鹿児島県)

本部車両 櫻井秀雄(愛知県)

撮影班 篠島幹夫(富山県) 林賢二(富山県)

勇崎 晃(富山県) 稲場弘志(富山県)

高田 健(富山県)

オープンチャット 丘 宗宏(福井県)

本山へ御輿車搬送 日下部 融(福井県)

事務局 吉江晃(富山県)

10月3日(金)第1日

会所等 井波別院瑞泉寺 池尻 真光寺

井口 光徳寺 城端別院善徳寺

サポート参加 名古屋教区第9組 36名

尾張はじまり講 26名 和田乗道(愛知県)

八幡正之(富山県) 碓井清一(富山県)

松田亜世(京都府) 水上茂雄(富山県)

小島勇正(富山県) 池端俊文(富山県)

阿部泰朗(愛知県) 竹本智博(富山県)

中田秀芳(富山県) 松尾正壽(石川県)

送迎車両 源 大寿(富山県)

10月4日(土)第2日

会所等 城端別院善徳寺 大窪 大福寺

高宮 隨順寺 五宝町 知源寺

福光城址栖霞園 砂子谷 満行寺

高木場御坊跡 宮野 光闡寺 薬師 傳長寺

堅田 本教寺

サポート参加 竹治弘明(富山県)

竹治由佳里(富山県) 長谷川範明(富山県)

細木叔美(富山県) 竹田絹子(富山県)

中井松子(富山県) 西村愛子(富山県)

水林慶子(富山県) 垣添忠生(富山県)

河原ノリエ(富山県) 川原怜(富山県)

御輿車搬送 徳光和彦(富山県)

山崎佑二郎(富山県)

送迎車両 梨谷真嗣(富山県) 勇崎晃(富山県)

野田博俊(富山県)

10月5日(日)第3日

会所等 堅田 本教寺 才田 明現寺

才田 御亭山 八田 法圓寺 八田 光徳寺

木越 光蓮寺 木越福千寺 金沢東別院

松任 古城公園 松任 本誓寺 松任 真教寺

松任 願念寺 松任 聖興寺 松任 城址公園

米光 佛屋敷 川北 浄秀寺

サポート参加 篠崎賢治(石川県)

竹田外喜男(石川県) 辻本隆昭(大阪府)

野間千秋(愛知県) 香城満(石川県)

木野陽子(石川県) 尾原和美(石川県)

藤溪公夫(石川県)

支援車両 金沢教区2名

10月6日(月)第4日

会所等 川北 浄秀寺 高堂 宗圓寺

蛭川 蓮光寺 西町 稱名寺 寺町 本覚寺

東町 勸歸寺 小松大谷高校 粟津 本廣寺

那谷町 花山亭 山代 専光寺

サポート参加 川端修(石川県)

堂下豊治(福井県)

御輿車搬送 清水清春(石川県)

支援車両 島田森夫(石川県)

10月7日(火)第5日

会所等 山代 専光寺 長谷田 願誓寺

上原 法圓寺 桂清水のカツラ 山中 燈明寺

下谷町 蓮如堂 小塩 妙徳寺

天崎御退去記念碑 大聖寺教務支所

上河崎 腰掛石 荒町 臺攝寺 吉崎別院

御山御坊跡

サポート参加 宮崎護(石川県)

支援車両 小松大聖寺教区3名

送迎車両 居島浄(富山県) 森下広志(富山県)



「御帰山」にご参加いただいた方々の感想文です。

(「前の名簿」の順番に感想を入れております。)

蓮如上人井波御下向

550周年記念御影道中御帰山を終えて

講師・随行教導 富山県 太田浩史

御影は偶像ではなく、影向である。『粟承余草』は「仏像顕現之事」に「自余ノ仏像ハ凡夫ノ方ヨリコレヲ立ツ、当流ノ仏ハ彼方ヨリ影向シ玉フ」という。「証巻」に「弥陀如来は如より来生して報・応化・種々身を示現したまう」とあるように、影向は還相廻向の自然莊嚴として報身報土の覚体が本廟にあらわれたものである。よって阿弥陀木仏と開山真影は両殿唯一の道理において不二であり、弥陀直説のすがたである。蓮如上人御影も御文と同じく「かたちを見れば法然、ことばを聞けば弥陀の直説」である。かくして自然莊嚴の応化身は普等三昧に住し、肉身等同の教化力を發揮する。それを

「生身」というのである。「生身」の法力のものすごさをまざまざと体験したのが今回の道中であった。

十月三日午後一時三十分、蓮如上人井波

御下向550周年記念御影道中は御帰山に

のぞんだ。宣心院鍵役のお見送りをいただいて

井波別院を出発した。背中に「井波」と入った

法被をまとう井波彫刻組合役員らに担がれた

蓮如上人は「よいとこ井波」で御輿車に

移された。先頭に並んで綱を引くのは田中幹夫

南砺市長と武田慎一富山県議会議長、「信仰と

木彫りの町」井波において蓮如上人は

おおやけの存在である。八日町を練り歩いた

蓮如上人は、百人以上の行列を従えてゆっくり

井口に向かう。途中 川原崎神社で小休止、

日野恵隆著『親鸞聖人の研究』によると、河崎

専称寺の開基はここで、越後に向かう親鸞聖人と

と問答し弟子となったという。ならばこの道

は承元の法難における親鸞聖人護送ルート

だったことになり、聖人の足跡をもとめて、

如信、覚如、存覚、綽如、巧如、蓮如などの各師が往来したことになる。

神社を出発した御輿車は一気に速度をあげて

本来の道中歩きとなる。百人の行列はたちまち

散り散りになり、必死についてきた富山新聞の

記者は「まるで競歩」と書いた。三十分も

遅れて喘ぎながら池尻真光寺についた人たちは、

それでも「ありがたい」を繰り返しながら満足

そうに冷えた麦茶を飲んだ。井口光徳寺は

コロナ禍で中止された落慶法要のかわりに

門徒衆に改修なった本堂を披露する機会を得た。

城端別院善徳寺の山門をくぐった御輿車は

蓮如太鼓の出迎えをうけた。550年前、上人

との別れに奏でられた太鼓である。五百余年間

津幡町に伝えられたが、後継難で断絶しそうに

なったところを城端別院の同行衆が受け継い

だ。太鼓は蓮如上人にふさわしく明るく

にぎやかである。

十月四日城端を発った御輿車は大窪大福寺に

到着。早朝より お待ちうけ行事として法話が

あり、朝粥が振舞われたので満堂の出迎えをうけた。清水供奉人があいさつする。

「蓮如上人は木像よりは絵像、絵像よりは名号と言われました。お賽銭も硬貨よりは紙幣と、軽いのが好きであります」、珍妙な説明は嫌味がなく、笑いながら紙幣を籠に入れる人々。高宮隋順寺には数多くの蓮如上人真筆や遺品があり、この地と上人の結びつきを感じる。

善徳寺の前身があつた御坊町知源寺を経て福光城跡栖霞園に御櫃をおろして勤行。この城は文明十三年（一四七五）田屋川原合戦で滅んだ名門石黒氏の居城で、一揆衆に焼き討ちされたあとへ善徳寺が進出した。いわば暴力革命である。「百姓の持ちたる国」を単純に肯定する見方は改めねばならない。

栖霞園を後にした御輿車は自動車で砂子谷満行寺に到着した。二〇二三年七月十三日南砺市で線状降水帯が発生、砂子谷地区の渋江川が氾濫する怖れが生じたことから、隣村高窪地区の市議会議員赤池伸彦さんは自治会長

の満行寺住職鳥越知証師や地区の人たちと住民避難を呼びかけた。午前二時ごろ赤池さんが連絡がつかない家に一人で向かったところ、突然土砂崩れが発生して、翌日午後赤池さんがれきの中から遺体で見つかった。遭難現場に御輿車を止めて勤行、赤池さんのお連れ合いが合掌する。

高窪地区には上人の腰掛石があつたので、その上に御櫃を据えて勤行する。赤池さんのような利他の人はこの腰掛石が育てたのかもしれない。ある高木場御坊跡は蓮如上人第四男蓮芸が御坊を営んだ場所で、御坊はのち末女から古国府に移り勝興寺となった。地元の人達がこの日のために草を払って道をつくり、用意されたテントで雨をしのぎながら勤行した。

宮野光闡寺まで自動車移動し、薬師伝長寺に向かつて歩いた。この寺には河北郡門徒に下賜された教如上人寿があり、蓮如・教如の寿像対面となった。この夜は堅田本教寺で宿泊。本教寺住職には企画段階からお世話になり、

御輿車をトラックで運んでもらうなど、陰に陽にお世話になった。各自持参の寝袋で寝る。寝袋使用は今回道中のイノベーションである。会所の負担が少なくなり、経費も節減でき、乗用車のトランクで全員分が運べる。

十月五日、才田明現寺にお立寄り、蓮如上人が河北潟を眺めるために門徒が築いた御亭山が現存しているのに驚いた。八田法円寺・光徳寺を経て木越光蓮寺・福千寺を巡る。木越は一向一揆が織田軍の將佐久間信盛に蹂躪された場所である。落ち延びた門徒は能登各地に逃れて蓮如信仰を伝えた。金沢別院では雨の中御輿車を練り歩き、昼食後松任に自動車移動。本誓寺、真教寺、願念寺と由緒ある寺々を巡り、聖興寺では俳人千代尼の墓に詣で、吉崎で詠まれ

「うつむいた　とこがうてなや　すみれ草」の句境をしのぶ。自動車移動で親鸞聖人が承元の法難で手取川を渡った故地である米光仏屋敷に土地の人々とともに参拝したのち、川北浄秀寺

に宿泊、住職や門徒の方々からの手あついてもてなしに談論風発の花が咲く。

十月六日、早朝から高堂宗円寺に詣でる。

住職の一楽真師は大谷大学学長の職にあり、満面の笑みで赤い御櫃を迎えた。蛭川蓮光寺を経て小松の町に入って称名寺、本覚寺と巡り、勸婦寺では能美郡真宗の要である「郡中の御影」にお参りした。奉掛されていないが、陰ながら拝んだ。小松大谷高校では全校生徒・教職員あわせて千人の出迎えを受けた。体育館を埋めた生徒が合唱する「真宗宗歌」の中を入场し、「恩徳讚」の中を退場したときは感無量だった。将来の宰領・供奉人が生徒たちの中から現れるだろう。三角笠をかぶった供奉人の恰好に「カワイイ！」を連発していた女生徒がそうかもしれない。

粟津温泉の本仏寺にお立寄り、粟津は蓮如・応玄和解の故地である。仲介の労をとったのは、当時津波倉にいた本蓮寺蓮覚だったという。それからは「道中歩き」で山代温泉に向かい、

「蓮如上人袈裟かけの松」で有名な専光寺に逗留した。女性住職の音頭で婦人会から心づくしの饗応をうけた。

十月七日、桂地蔵の清水を飲んで山中温泉に

入る。願誓寺、法円寺とめぐった道中は、燈明寺に至る。文明五年富樫家の内紛の際、

幸千代党と結んだ高田派門徒が吉崎破却の姿勢

を示したので、蓮如上人は越前の藤島超勝寺に妻子を避難させ、自らは超勝寺、下間蓮崇など

わずかな供奉人をつれて山中の黒谷城主 富樫

政昭を頼った。これが一見のどかな印象のある山中逗留の真相である。蓮如上人に謁した富樫

政昭は法名を称念と賜り、燈明寺の祖となった。

世知に長けた蓮崇は政昭を通じて越前に亡命した十九歳の富樫政親を味方につけ、幕府の

奉書を使って門徒を動員、幸千代と高田派を

蓮台寺野に打ち破って政親を加賀国守護に擁立した。これにより門徒は蓮崇に心腹し、

蓮如上人や下間丹後は蓮崇の独断専行に

振り回されるようになる。天才軍師 蓮崇は上人

の意志を我意に付度し、自らの策に溺れた。

二年後には政親との戦争となり、越中に遁れた

加賀門徒慰問のため蓮如上人井波下向が

行われたのである。

山中に着いた時の上人は疲れ切っていた

らしく、下谷村の人々が自然薯を掘って

もてなした。そのとき上人が筵の上で書いた

ので、虎の縞のような模様があらわれたという

「虎斑の名号」が蓮如堂に掛けられている。

蓮如堂は地元の住民に守られ、多くの人が堂内に集った。それより一気に小塩妙徳寺に向かう。

住職は能登支援に奔走しておられる。能登の

寿像の来錫を感銘深く迎えて下さった。寺から

少し歩けば天崎の上人船出の地があり、

蓮如上人吉崎退去記念碑がある。レリーフに

掘られた上人の無念そうな表情が印象的であつた。

あつた。

それより大聖寺の町に入り、河崎上神社の

腰掛石で勤行する。これまでいくつもの腰掛石

と出会ってきた。ここは河崎専称寺があつた処

で、淵源は遠く井波の河原崎神社に由来する。

最後の お立寄り処である毫撰寺で法座、覚如上人第一の弟子乗専に由来する この寺は古い歴史を秘めている。御遺跡は泉のようなものであり、井戸は古格を帯びるが清水は常に新しい。ここの住職は今回の道中の縁の下の力持ちとなり、大変ご苦労をいただいた。午後五時二十分、吉崎山上の御坊跡と蓮如上人銅像に無事御帰山の報告をなし、九月二十七日より十一日間におよび道中を終了した。雨雲が立ち込めて仲秋の名月は拝めなかったが、参加者の心には円成の月が冴えわたった。今回 真宗再興の盛儀はすべて 御影がなされたことであり、われら供奉人は付き従っただけである。そして今や御影は能登の真宗再興を
目指しておられる。



井波道中御帰山を歩いて

随行教導 石川県 國分大慶

まずは五日間の道中をほぼ予定通り、大きな怪我や事故なく無事に歩く事ができて良かったという思いが真っ先にうかびました。また、親鸞聖人・蓮如上人の歩みや御旧跡を尋ね、大いに学ぶことができました。こんなにも身近なところに御旧跡があったのかという驚きと、その有様に時の移ろいのはかなさを感じました。そして、随行教導として、限られた時間の中で、行く先々で待ち受ける人々へ、どういうことを伝えるかを考えさせられました。もっと親鸞聖人・蓮如上人を初め、御聖教に触れる生活を深めていきたいと思いました。

『歎異抄』第十二条に「他力真実のむねをあかせる もつもの聖教は、本願を信じ、念仏をもつとば仏になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。」とあります。御聖教を学ぶのは本願のむねを知り、念仏もつためです。

真宗中興の祖と言われる蓮如上人のお仕事として、正信偈・和讃の開版、御文の製作、

お朝事・お夕事の勤行が挙げられます。これらのお仕事の結果、真宗門徒は一日の生活を勤行で始め、勤行で終わるという生活の型を作りあげました。そして、生まれや年齢、身分が異なっても、こと浄土真宗の御法義については、共通の話題として話し合うことができる土壌が作られました。これが後に寄合談合となり、教団を作り上げる原動力となったのでしよう。

言うなれば、お朝事・お夕事は念仏もうす場を開き、一人から始める浄土真宗の御聖教の基礎学習の機会であり、教団の基礎となってきたと言えらると思います。

その御聖教を読むことについて、『蓮如上人御一代記聞書』では随所に注意しています。

例えば、第十一条では「聖教をよくおぼえたりとも、他力の安心あんじんをしかと決定けつじょうなくはいたずらいことなり」と述べています。

第九十条では、繰り返し読むことの大切さを述べています。

第二二五条では、物を読む・復習する・義理をわきまえる、それで終わらず（本願を）信じていることが大事と述べています。

親鸞聖人・蓮如上人の時代、「よむ」には、声に出す、数を数えるという意味が含まれています。現代でも「和歌をよむ」「票をよむ」という形で残っています。

認知機能を維持するトレーニングとして、文字を読む・声を出す・簡単な計算をする、という活動が有効だそうです。

お朝事・お夕事を勤めることは、自ずと認知機能を維持するトレーニングをしているということになるのではないのでしょうか。加えて、お朝事・お夕事を勤めた自分に「褒美」として賽銭を出し貯金することで、自ずと法事・報恩講を勤める備えになり、金銭欲という煩惱を離れる訓練にもなるのではないかと思えます。

蓮如上人御一代記聞書第四五条では、

「あかお（赤尾）の道宗、もうされそうろう。

「一日のたしなみには、あさつとめに

かかさじと、たしなめ。」と述べています。

真宗再興の、そして御影道中の歩みは、真宗門徒のたしなみとしてお朝事・お夕事を勤めに仏間へ歩みを進める第一歩から始まるのではないのでしょうか。

驚きと出遇いの連続

供奉人 茨城県 川島弘之

今回の井波御下向は、五五〇年ぶりのことでした。はたしてどのようなことになるのか、

予測がつきませんでした。しかし、途中から道中に合流し歩き出してみても、驚きました。

お立ち寄り会所の本堂は、砂漠に水が湧き出すように、どこも満堂の賑わいでした。

もちろん実行委員会の事前準備、寺院や

教務所、サポーターの協力があったのことですが、やはり真宗王国と言われるこの地の土徳が、

蓮如上人のいのちを蘇らせたのにちがひありません。それは逆に言えば、御輿に乗った蓮如上人が、行く先々で五五〇年ぶりに人びと（わたしも含めて）の眠りを破ってくださいましたということでもあります。

人びととの出遇いがあり、立ち寄った御旧跡では、そこに髻ほうかつと立ち上がってくる蓮如上人との出遇いがありました。五五〇年に一度という千載一遇のチャンスに供奉人として参加させていただいたことは、わたくしの生涯の宝物です。ありがとうございました。

楽しかった北陸路の御影道中

供奉人 愛知県 高木芳信

私にとって今回の井波御下向道中は行く前から、初めての北陸路の御影道中であり

「心」が踊っていました。井波別院へ行く前に世界遺産の越中五箇山の合掌造りを見学して富山県に入りました。井波別院に着いて 本堂に

御輿車が置かれていたのが最初の驚きでした。

10月2日の夜は、「井波別院瑞泉寺報恩講『宣法院殿並びに御影道中』交流会」が行われ、女性の皆様のコーラスや三味線と唄に合わせた「富山こきりこ節」が踊られ大盛況でありました。

翌日から御影道中が始まり、井波別院でお勤めがあり蓮如上人の御影のレプリカが飾られ・

今回の道中で御輿車の操作をされる予定であった「金尾誠一さん」が突然亡くなり、金尾さんの遺影も御影の近くに置かれました。道中の全ての会所で、御影と遺影が置かれ、太田教導が法話で「金尾さんのお話」もされました。

今までの御影道中では、御影のレプリカを飾られ、遺影を飾られ、法話されることはなかったのですが、心が打たれました。

井波別院で藤原宰領の門徒の方がバスで来られていて、知り合いの人達と親睦を図りま

した。

3日午後から道中が始まり、3日の最終地点の城端別院に着いたら「蓮如太鼓」が打ち鳴らされて、その盛大さに感心致しました。

バスで来られていた門徒の人達も満足顔でした。小松高校へ行き、全高校生が屋内体育館で

御影道中をお迎えして頂き、各供奉人の役割と氏名を紹介しました。高校生からの質問もあり、楽しい時間でした。ここは高校生から京都の大谷大学などに行き、僧侶のなる人がたくさんいると思えました。一般社会では教えることがない仏教を、高校生に教育することは素晴らしいことです。

御影道中をしていて「北前船の里資料館」の看板があり、昔の人達が北前船で作物や魚介物を運ばれていたことを想像致しました。

最終日に吉崎別院へ到着したら、通称「御山」と呼ばれる千歳山に登り、お参りをされ、無事御影道中が終了したことが嬉しかった。

初めての井波地区への御影道中は、富山新聞

などが毎日写真入りで報道され、地域の皆様

も喜ばれたと思います。昨年9月下旬に能登地方で前線・低気圧で線状降水帯が発生し、多数の死者や家屋が倒壊しました。その能登地方に御影道中の話があると聞きました。地震と豪雨があつた地域へは、今回の井波道中より大変な準備とご苦労があると思います。

私に執りまして、今回の井波御下回道中は、今までの御影道中とは全く違う、新しい発見と喜びがあり、嬉しかったです。ありがとうございます。

無量寿を生きておられる蓮如さんに出会えた！

事務局 富山県 吉江晃
今回、事務局として、本当に大変でしたが、苦勞をした分、御影道中を深く体験させていただけました。

一番、感動をいたしましたのが、十月四日の本教寺のご住職の最後の挨拶でした。

「蓮如さんの御寿像が歩いてきて どうなるのか、」と思っていたけれど、御寿像の蓮如さんは、今でもちゃんと生きていて、多くの方に働きかけて、本堂が にぎやかに、満堂になっていた。こんなにうれしい出来事、こんなにすばらしい驚きに出会ったことがない。今も生きて働いておられる蓮如さんのお姿を見て泣けてきました。」

というような感想をお話くださり、僕と長谷川さん（城端別院で蓮如さんを演じておられた方）は、一緒にもらい泣きをしておりました。

今回、事務局・会計・受付等をさせていただきましたが、ちよつと、大変すぎまして、次回は、事務局・会計を誰かにお願いできたら、ありがたいことだと思います。

スタッフ募集でございます、よろしくお願ひいたします。

合掌



御影道中に参加して

名古屋教区第九組 青宮寺門徒 木村広樹

私は、この度蘭法研修旅行の一環として、蓮如上人御影道中に十月三日井波別院より城端別院まで名古屋教区第九組の一員として参加させていただきました。

井波別院瑞泉寺では報恩講参拝、おときを頂いた後に出発式が執り行われ、その後城端別院善徳寺まで徒歩にて移動する行程でした。出発式には南砺市長、県会議長も参加されておられました。

出発してまず、最初に驚いたのは道中では沢山の人のお出迎えを受けたということでした。中にはわざわざ車を止め、膝まづいてお参りされる方も見られびっくりしました。北陸の信徒は信仰が熱いとは事前にお聞きしておりましたが、正に驚きでした。途中真光寺、光徳寺の二カ所にて休憩を取らせていただきましたが、両寺とも沢山の門徒さんがお参りに参加されており、歓迎を受け驚くほかありませんでした。

せんでした。また両寺では冷たい飲み物の提供を受け本当に美味しかったことが、今でも忘れることなく記憶に残っております。

又、道中では本山より応援に派遣されているという若い僧侶の方が汗だくになりながらも、ずっと先頭で引張って頑張って頂いていたのも印象的でした。私はその後ろでロープに掴まっているだけだったと、今更ですが反省しております。併せて地元の方とも沢山お話ができてよかったです。

城端別院善徳寺では、これ又沢山の門徒の方と蓮如太鼓の歓迎を受けたあと参拝し、帰路につきました。今回大変疲れはしましたが、本当に楽しく参加させて頂き、記憶に残る研修旅行となりました。

最後となりましたが、企画と立案、ご引率頂きました名古屋教区第九組寺院関係者の皆様には、大変お世話になり有難うございました。謹んで感謝申し上げます。

聞法研修旅行

・能登の真宗と御影道中・に参加して

名古屋教区第九組 青宮寺門徒 木村勝正
名古屋教区第九組主権の研修旅行に参加

できたことを嬉しく思いました。そして
組長さんの思いに強く感銘をうけました。

1日目、能登教務所での輪島教区門徒会長の
お話は、衝撃的でした。実際の震災で全壊した
寺の映像を見るにつけ、今後の復興や復旧の
困難さをまざまざと思ひ知らされました。もし、
尾張地方に大地震がと想像すると・・・
何もできない自分ですが、1日でも早く能登
地方の真宗門徒の方が、元気に立ち直って
ほしいと願うばかりです。

2日目、今回の旅行のメインであった
蓮如上人550周年記念御影道中に参加する
ことができました。

井波別院瑞泉寺から城端別院善徳寺までの
行程を各地から訪れた方々と一緒になって歩き
ました。蓮如上人の御影を棺に納め、お車で

運ぶというものでした。途中真宗ゆかりの
様々な場所に立ち寄りながら道中進みました。
そんな催しは、地元紙や報道機関にも取り上げ
られていました。

のどかな田園地帯が続く道を皆さんで綱を
引きながら お運びする車の先導をいく先触れ
の方が「蓮如上人様のお通り」と呼びかけると、
一同が呼応して「お通り」と答え、立ち寄る寺
に近づくと、「蓮如上人様〇〇寺にお着き」と
呼びかけ、呼応して「お着き」と答える。
寺では蓮如上人様の御櫃を運び、法要が営まれ
ました。そうした流れは瑞泉寺から善徳寺まで
途切れることなく続きました。

先触れの方の呼びかけはこだまのように
響き渡り、道中が進む沿道には、多くの門徒の
方々が出迎え、手を合わせる方やお布施を
渡す方の姿が途切れることがありませんでした。
道端に座り、いつまでも頭をたれ手を合わせて
いる高齢の女性の姿がありました。また、
対向する車の中から、手を合わせる方も

見えました。550年の時を経て今も皆さんの
心の中に生き続けているのだなと感じましたし、
信仰心の強い地域であることも分かりました。
10月初旬でしたが、まだ日差しは強く
道中 随分汗をかきましたが、休憩を入れなが
ら完走することができました。汗はとても心地
よいものになりました。心が洗われただからの
ように思えます。

我々は善徳寺で終えましたが、その後の吉崎
別院までの御影道中の様子は、LINEで知る
ことができました。多くの方の協力で毎年御影
道中が行われていることはすごいことだなと
感銘を受けました。日頃 自宅で蓮如上人様の
お文様を読ませてもらっている私にとって、
蓮如様が身近な存在になりました。

非日常の世界にふれ、
心休まる2日間に
なったことに
感謝いたします。

